斎藤茂吉の病気観

小　泉　博　明*

［要旨］『アララギ』「斎藤茂吉追悼号」（昭和 28 年 10 月号）の平福一郎による「斎藤茂吉先生剖検所見概要」によれば、茂吉には、肺における結核性病変と循環系における硬化現象の二つの病気があった。本稿では、精神科医である茂吉の病者に対する眼差しではなく、茂吉自らの病気観に焦点を当て、その底流にある生死観を考察するものである。とくに、長崎医学専門学校教授時に感染したインフルエンザと喀血、欧州留学前の脚気と腎臓病の病誌を論ずるものである。

1．はじめに

斎藤茂吉は高名な歌人であると共に、青山脳病院院長として、その重責を全うした精神科医である。茂吉が医学へ、とくに精神医学へ進学するようになったのは、茂吉自らの志望というよりも、むしろ養父との関係で宿縁と言わざるをえない。しかし、茂吉は、その宿縁に逆らうことなく、当時は「感謝せられざる医者」と呼ばれた精神科医として、世間から否定的な眼差しを向けられていた病者に寄り添い、近代国家による衛生国家が推進され、病者への差別や排除あった時代のなかで、病者の負のエネルギーを自ら吸収するように、その責務を誠実に果たしたのであった。また、自身の歌業を「業余のすさび」と称しながらも歌人として認められるに従い茂吉にとって、文学者であり、医者という先駆者として、陸軍統監医にまでなった森鷗外は、大きな存在であり、その影響を受けたのであった。

ここでは、茂吉の病者への眼差しではなく、茂吉自らの病気観に焦点を当てるものである。そして、茂吉の病気観の底流にある生死観を考察するものである。

2．茂吉と腸チフス

山形県南村山郡金瓶村から 15 歳で上京した斎藤茂吉は、精神科医で養父の紀一の後継者として期待され、第一高等学校から東京帝国大学医科大学へ入学した。この入学が決定したこと

＊准教授／倫理学

により、1905（明治 38）年 7 月 1 日に、紀一の次女てる子（輝子）の婿養子として、斎藤家に正式に入籍した。てる子は、まだ 11 歳の若さであった。このように、紀一の期待に着実に応えていた茂吉であるが、1909（明治 42）年 6 月 30 日に、東京帝国大学医科大学の学生であったが、腸チフスに罹患し、40 度近い高熱を出し、8 月末まで病床に就いてしまった。そのため、卒業試験を放棄せざるをえなかった。恢復の徴候もあったが、11 月初めから再び発熱し、12 月 28 日まで日本赤十字社病院隔離病室へ入院し、生死を彷徨するような状況であった。体力が恢復し、大学へ登校できるようになったのは、翌年の 5 月 2 日のことであった。

茂吉が罹患した腸チフスは法定伝染病である。岡田靖雄によれば、患者数は「1908 年が 24,492 名、1909 年が 25,101 名、1910 年が 35,378 名。1909 年にとくに流行したわけではない。この年の人口 10 万人対罹患率は 50.8、その後罹患率はあがっていき、1924 年の 100.1 にいたる。1909 年の腸チフスによる死亡は 6,018 名で、患者の死亡率は 24 パーセントであった。」とある。[1] 罹患者の死亡率が、四人に一人ということを見ると、当時はかなり高い致死率といえよう。茂吉のように、治癒したように見えても、再発することがあり、厄介である。その辺の事情を書簡から見ると、次のようになる。

古泉幾太郎（千樫）宛の書簡、8 月 4 日には「熱も追々下がるが身体のつかれがヒドくて困る話しない事もあるけれど又口きくのがいやだ。二週間タッタらよかろー」[2] とある。同じく古泉宛 8 月 29 日には「まだ電車でなど遠い処にゆくなと母上がいふから今までグヅグヅして居た」[3] とある。このように 8 月下旬にはほぼ恢復していたのであった。そして、同じく古泉宛 9 月 3 日には「試験は断念いたし候（略）歌でもつくれば少しは気も安まると思へどどういふ工合か一ツも出来ず癪にさはり申し候」[4] とあり、9 月 26 日には「明日から学校に参り申すべく候」[5] とまで恢復した。

ところが、一転して腸チフスが再発し、12 月 31 日の高橋直吉宛の書簡には、次のようにある。高橋直吉とは茂吉の弟であり、山形県上山町の高橋四郎兵衛に婿入りし、旅館山城屋を経営する。

> 拝啓。小生事、十一月初めから再び発熱（腸チプス）にかゝり赤十字病院に入院いたし申候。正月も来る事なれば一先づ今月廿八日退院いたし候。まだ全く痩せ衰へて寐てばかり居り候。実は御通知申上げる筈の處なれども只御心配かけるばかりと存じ金瓶にも何處にも通知いたさずに居り候。それで入院中は面会も謝絶、手紙出す事も見る事も出来ず[6]

『赤光』のなかに「分病室」という連作があり、まさに、隔離病室へ入院していた時の作品である。

> この度は死ぬかも知れずとも思（も）ひし玉ゆら氷枕（ひようちん）の氷とけ居たりけり
> 隣室に人は死ねどもひたぶるに帚（ははき）ぐさの実食ひたかりけり
> 熱落ちてわれ日ねもす夜もすがら稚（おさ）な児のこと物思へり
> のびあがり見れば霜月の月照りて一本松のあたまのみ見ゆ
>
> （『赤光』分病室　明治四十二年作）

茂吉は随筆で、「僕の隣室では入って来る者が死んで、僕のいるうち三人ばかり死んだ。消毒するフォルマリンのにおいが僕の室にも少し漏れてきたりなどした。けれども幸いに僕は生きて毎日たべ物のことばかり考えていた」（『思出す事ども』）[7]　また、「ぼくが熱を病んだときのことである。病院のベッドのうえに目をつぶりながら、あの魚卵に似たほうき草の実が食べたいとそのことばかり思っていた。親も師も友も、ぼくが死にはしまいかと心配していてくれたところである。」（『童馬漫語』）[8] という。茂吉は、隣室では病人が死に、生命の危機にさらされている状況下で、幼少年時代の食べ物を思い出し、無性に食べたいと思う。ほうき草の実は、茂吉の生きたいとと願う、生のエネルギーの表象であろう。ほうき草は、ホウキギと呼ばれ、茎は高さ 1 メートル位になり乾かし帚となり、茂吉が食べた帚草の実は「とんぶり」と呼ばれ食用となった。

茂吉にすれば、医科大学を卒業し、これから医者として出発しようという大切な時期に、卒業が一年間延期されるという事態となり、死への恐怖よりも何としても養父への期待に応えようとするエネルギーが結果的にまさったともいえよう。そして、茂吉の病気観は、病気平癒を神仏に祈念するものでもなく、あるがままに自然に身を任せるというものであったと推察されるのである。

茂吉が東京帝国大学医科大学を卒業したのは、1910 年 12 月 27 日のことであった。成績は 132 名中 131 番ということで、かろうじて卒業できたという結果であった。

3. 茂吉とスペイン風邪

茂吉は、1917（大正 6）年 12 月 3 日付けで、長崎医学専門学校教授に任じられ、併せて、県立長崎病院精神科部長として赴任した。一人で、研究者、臨床医、そして教育者の三役を担い、多忙な日々を過ごすこととなった。

1918 年から 20 年にかけて、パンデミー（世界的流行）となった「スペイン風邪」は、全世界に猖獗をきわめたインフルエンザであり、約 6 億人が感染し、少なくとも 2000 万人から、一説には 4000 万人が死亡したと推定されている。発生源は諸説あるが、ヨーロッパでは第一次世界大戦の最中であり、西部戦線で睨み合っていた両陣営で、爆発的に流行し、フランス全土を席捲し、やがてスペインへと蔓延していった。1918（大正 7）年秋になると、この恐懼の「スペイン風邪」が日本へ上陸し、越年して全国に猛威をふるった。日本でも約 2380 万人が感染し、3 年間で 38 万 8 千人が死亡した。また、人口千人当たりの死亡者数は 6.76、患者 100 人当たりの死亡者数は 1.63 であった。[9]　当時は、インフルエンザに対する知識も、効果的な治療法もなかったが、交通網の発達により、流行の拡大が急激であり、まさに激甚なる病魔であった。

茂吉が在住した長崎でも大流行し、1919 年（大正 8）年の暮れに、長崎の石畳を歩きながら、次の歌をつくった。この時点では、自ら関わる「はやりかぜ」ではなく、他者への眼差し

で冷徹に「はやりかぜ」をよんだのであった。

寒き雨まれまれに降りはやりかぜ衰へぬ長崎の年暮れむとす

（『つゆじも』大正八年作）

1920（大正 9）年 1 月 6 日、東京から義弟の斎藤西洋が長崎を訪れたので、妻のてる子と長男茂太と共に、大浦の長崎ホテルで晩餐をとり、楽しく過ごした。ところが帰宅後に、茂吉自らが急激に発熱し、寝込み、「スペイン風邪」に罹患したのであった。肺炎を併発し、四、五日間は生死を彷徨し、一時は生命を危ぶむ状況であった。同時に、てる子と茂太も罹患したが、症状は比較的軽微で、すぐに恢復した。茂吉は 2 月 14 日まで病臥にあり、同月 24 日から勤務したが、病み衰えた身体は、本復というにはほど遠かった。ちょうど 50 日余も治療と療養に専念したのであった。この時の状況が次の歌である。

はやりかぜ一年（ひととせ）おそれ過ぎ来しが吾は臥（こや）せりて現（うつつ）ともなし

（『つゆじも』「漫吟」大正九年作）

なお、長崎医学専門学校でも、茂吉と同日に、スペイン風邪に罹患した同僚の大西進教授が、その後に罹患した校長の尾中守三教授が相次いで死亡するほど、猛威をふるったのであった。

2 月 16 日に、漸く一時恢復した茂吉は、島木赤彦宛の書簡で次のように記した。

御無沙汰仕りたり一昨日より全く床を離れ、昨日理髪せり、今日朝からかゝりて選歌し、未だ疲労ひどし。歌は一句ぐらゐづゝにて一首も纏めずにしまひ候、下熱後の衰弱と、肺炎のあとが、なかなか回復せず、いまだ朝一時間ぐらゐセキ、痰が出てて困る。東京の家にも重かった事話さず、たゞ心配させるのみなればなり。茂太も妻も、かへりて臥床、この時は小生も少し無理して、それで長引いたかも知れず。[10]

どうにか勤務を始めたものの、6 月 2 日に突然の喀血に見舞われ、さらに 8 日に再喀血した。茂吉は煙草を止めた。その後も病状がいっこうに恢復しないので、6 月 25 日には県立長崎病院西二棟七号室に入院し、菅原教授の診察を受けた。10 日間余りの治療であったが、好転したということで、7 月 4 日頃に退院した。入院中に、次の歌がある。

病（やまひ）ある人いくたりかこの室（へや）を出入（いでい）りけむ壁は厚しも

ゆふされば蚊のむらがりて鳴くこゑす病むしはぶきの声も聞こゆる

闇深きに蟋蟀（こほろぎ）鳴けり聞き居れど病人（びようにん）吾は心しづかにあらな

（『つゆじも』「漫吟」大正九年作）

その後、猛暑の中での自宅静養となったが、転地療養を必要とし、7 月 26 日から 8 月 14 日まで、島木赤彦、土橋青村、てる子に伴われ、温泉嶽（雲仙）よろづ屋旅館へ移ったが、時おり血痰があった。8 月 12 日には、九州帝国大学教授で耳鼻咽喉科の久保猪之吉の診察を受けた。

耳、鼻、咽、喉、にかはりなし。万歳、！！/　血の出る処が narbig になるまで安静にしてゐる必要あり。/ 明治屋の菓子頂戴、（「手帳二」）[11]

8 月 14 日に長崎へ帰ったが、8 月 30 日には佐賀県唐津海岸の木村屋旅館へ、9 月 11 日から

10 月 3 日までは佐賀県小城郡古湯温泉の扇屋へ転地療法につとめた。その間の茂吉の体調について、手帳を参考に見ることにする。

二十五日　25 日朝出ヅ、分量やゝ多く、赤の濃き處あり

無言ノ行ヲナサント欲シ、午前福済寺ニ登ル、/　福済禅寺の石だゝみを日は照らすなり/

石のひまに生ひてそよげるかすかなる草/　午砲がなった　中町の天主堂の鐘が鳴る。かなしいこゑだ。汽笛なる。おくれて佛の寺の鐘なる、何のためにおくれるのか、太くやゝ濁って空気を振動させる。

晝寐　少出ヅ/　入浴　気持ヨシ/　夕食　とろろ飯　軽く五椀、/　夜高谷君来、薬（水薬コフエン除、カルシウム入）持参/　輝子小曽根ノ處ニ佐藤夫婦の懇談會とかに行く/　體温三六・九度　頭少しいたむ/　仰臥漫録を讀む、福済寺より見れば百日紅が町のところどころに見える、（「手帳二」）[12)]

ここで、注視するのは正岡子規の病床随筆の一つである『仰臥漫録』を、この日に読んだことである。いささか唐突な感じがするのである。子規は肺結核から脊椎カリエスを併発し、晩年の 5 年間は寝たきりの生活を余儀なくされた。『仰臥漫録』は、子規が死の前年である 1901（明治 34）年 9 月から、翌年の死の直前までの日々の生活を語ったもので、なかには赤裸々に号泣する病苦も記されている。1920 年は、茂吉 39 歳であり、年齢的に言えば、子規の晩年を上回っていたが、茂吉は喀血から結核を予感し、子規の病床随筆を急に手に取り、読んだのではないかという事は牽強付会ではなかろう。咽からではなく、肺から血が出たということを明確に意識したのであろう。

二十六日　盆　/　午前三時頃痰吐く、朝見るに、全く紅色にて動脈血も交り居る如し温泉にて出でたる如き色にてあれよりも分量多し、

Haemoptoe なることはじめて気付きぬ、

朝、痰少量、色紅まじる、あとは、血の線（ストライフエン）を混ず

入浴、淫欲、カルチモン 0. 五、原因を考えふべし

朝、怒の情なくなり、全然人を許し、妻をも許し愛せんとの心おこる。

朝紅茶二杯、二階にて国歌大観の新古今など読む。

夕日さす浅茅が原の旅人はあはれいづくに宿をかるらむ－経信、

しづかなる我のふしどにうす青きくさかげろふは飛びて来にけり

しずかに生きよ、茂吉われよ　（「手帳二」）[13)]

この二十六日の記事を見ると、Haemoptoe（喀血）の語句や、「朝、怒の情なくなり、全然人を許し、妻をも許し愛せんとの心おこる」という言葉がある。茂吉にすれば自らが医者であるだけに喀血への衝撃が、内弁慶で、癇癪持ちであり、家人にあれほど雷を落としていた茂吉に怒りの情さえも喪失させ、さまざまな確執のあった妻てる子に対しも宗教的な寛容と感謝の念を起こさせたのである。てる子との間には、年齢差だけではなく、性格、生活様式などの相

違を乗り越え、お互いが理解し合い、結婚生活を築いていかなければならなかったが、その努力は両者にとって結果的に徒労と言わざるをえなかった。長崎で、てる子との生活を始めたが、不和が絶えず、一時てる子が東京へ帰ることもあった。所謂、東京のハイカラで、活動的で、物怖じしない、てる子と農村で育った茂吉との間には、性格だけではなく環境の相違もあり時々であるが夫婦喧嘩があった。長崎では、てる子は外国人の主宰するジョルダン合奏団に加わり、ヴァイオリンをひいたり、歌ったりした。茂吉は、このような茂吉から見れば奔放な妻てる子を許し、しかも愛すると言うのであった。

そして、「しずかに生きよ、茂吉われよ」という言葉には、自らを叱咤し病気を克服するよりも、病気をあるがままに受容する茂吉の諦念（レジグナチオン）が凝縮されているのではなかろうか。この短い言葉には、命旦夕に迫るような心境が、何の誇張も虚飾もなく記され、胸に迫るものを感ずる。医者である茂吉にとって、この喀血はインフルエンザによるものではなく、結核を自覚し覚悟したものであると推察される。その後、10 月 1 日まで血痰は続くが、手帳には、日付、天候の後に、血痰の色、量などが連綿と几帳面に記されている。まさに、杉田玄白が自らの老いを『耄耋独語』に克明に記したように、医者として自己の肉体を冷徹に観察し、判断したのだ。

茂吉は生前に家人に対して「手帳」や「日記」の公開を拒絶していた。しかしながら没後には、長男茂太と次男宗吉（北杜夫）が、茂吉は公人である考え、公開に踏み切ったという経緯がある。公開を前提としていない手帳には、茂吉のあるがままの姿を見ることができるのである。8 月 26 日の喀血後も、毎日血痰の状況を観察している。煩瑣ではあるが、その後の状況を記す。

> 二十七日/　盆/　午前五時半　昨日ヨリ分量少ナケレドモ全ク紅色/　午前中横臥ス、午後四時吸入、痰少シ色ツク、午後十時吸入痰出デズ、十一時二十分淡紅色出ヅ（少シ）
> 二十八日/　精霊ナガシ/　午前二時喀血シタルニ色ツカズ。/　朝九時　吸入時、肉色中等量
> 二十九日/　朝三時頃ノモノ色ツカズ（心持桃色カ）
> 朝八時ノモノニ太イ線ノ如クニ色ヅク、二三回
> 唐津木村旅館、/　イロイロ準備スル　ハガキかく、/　カルシウムヲ竹下君ヨリモラフ
> （「手帳二」）[14]

そして、8 月 30 日には、唐津海岸へ療養した。

> 三十日　朝四時頃色ツカズ、六時、極ク淡紅色、然るに洋服著て少し窮屈ノ感アリシガ、淡紅色ニ色ツク。（午前七時半）夕七時、少しく色づきたるものいづ/　散歩やめて寝につく/　（略）
> 八月三十一日　朝五時、第二切ニ淡色、七時、淡紅色　分量少なし　（略）
> 夕食後－淡紅色ノ線ニ點　（略）
> 九月一日　朝六時起床、痰出デズ。海岸を散歩シ、城アトノ砂道ヲ歩ミナガラ咳シテ痰

ヲ出シタルニ淡紅色ノ塊（原）に梢濃キ紅色ノ太キ線ヲ混ズ、次イデ、第二回、梢濃淡紅色ノ塊、太い線　ついで、色濃くなり出ずず　要之、昨日よりも色濃し　しかしこれ咳して痰を喀出する際の出血なりしが如し。痰をも少し楽に喀血することを得ば結果よからんか、明朝よりも少し寝坊して自然に痰ノ出ヅルヲ待ツ方可ナランカ

二日　朝、痰尠し。鮮紅色の槐（原）あり。午前一回極少出ヅ、/　午前三時半水泳、のち淡紅色出づ/　夕食後直ぐ寝につけども鮮紅ノ少槐いづ　（略）

三日　朝、痰や丶多く、鮮紅ノ血痰喀出、のち出です、（略）夕方少し淡紅色、臥床後二點紅色いづ、

四日　朝痰イデズ、（強ヒテハ出サズ）洗面後極少ク紅點出ヅ、/　朝食後便所ニテ、極小紅點一ツノミ（略）

五日　夜二點いづ/　朝色つかず、（略）午後食後、淡紅色（略）

六日　朝、痰少ナク、朝食前痰カラミ、少々色ヅクノミ　（略）午後五時浴、色つかづ白色痰/午後八時浴後、淡紅色痰少シ（略）

七日　朝、痰多く、血液を混じ、少しく悲観、（略）

八日　痰多く血液ヲ混ズ　あと二三回出づ、（略）

九日　朝、分量多ケレドモ淡紅色ナリ。（略）

十日　朝分量多ケレドモ極メテ淡シ/　（略）　（「手帳二」）[15]

海風が強く、9月11日には佐賀県の古湯温泉に移動した。

十一日　天気ヨシ、淡紅色ノ部分限局少ナシ（略）

十二日　天気晴朗、朝七時、痰多量ナレドモ黄褐色後黄色（略）

十三日　天気吉ノチクモリ少々雨/　午前六時　痰少シ　前日ヨリモ紅ヤ丶強キ淡紅色（略）

十四日　/細雨終日　/分量多シ、黄色或ハ黄褐色（略）

十五日　/天気吉　/朝二回分量中等、黄色（略）

十六日　/天気吉/朝、分量尠、黄色（略）

十七日　/曇　/朝、痰色ツカズ。（略）正午、痰ヲ無理ニ出シタルニ血點ヲ出ヅ、どうも浅い處からだその決心つく。（略）

十八日　ハジメ色ツカズ、二度目、血線ヲ混ジ、三度目血痰（鮮紅色ナリ）/　洗面ノ時ニ血點二三、（略）

十九日　/子規忌　（略）朝、痰出デズ。故ニ無理ニハ出サズ。（略）

二十日　/　曇/　朝七時二十分ハジメノ痰寒天様、二度目ニ血點二三ヲ混ズ（略）

（「手帳二」）[16]

この後も続くが省略する。血痰の分量が減り、その色が鮮紅色から、淡紅色、黄褐色、黄色へと徐々に変化し、段々と快方へ向かっていくことが手帳の圏点を見ることでわかる。黄褐色に変化した時には、二重丸となっている。茂吉が、朝だけでなく昼夜を問わず、血痰の分量や

色を観察し、良くなったかと思うと、また逆戻りし悲観し、一喜一憂している姿を如実に髣髴させる。一日も怠ることなく、注意深く、念入りに、執拗なまでに自らの血痰を観察している。10 月 2 日になって、「吉/ 全ク出デズ」（「手帳二」）[17] とあり、10 月 1 日まで続いたのであった。その後、手帳には日付があり「不出」「不出」「不出」という文字が連日続く。

10 月 3 日に帰宅し、10 月 8 日には、新任の山田基校長に会った。続いて、10 月 11 日に長崎県西彼杵郡西浦上村六枚板で療養し、15 日には小浜温泉へ、20 日には佐賀県嬉野温泉へ移動し、26 日に長崎へ帰った。

10 月 28 日に学校と病院に出勤し、次の歌をよんだ。

病院のわが部屋に来て水道のあかく出て来るを寂しみゐたり

（『つゆじも』「長崎」大正九年作）

1920（大正 9）年は、評論活動が旺盛な年で、「アララギ」（大正 9 年 4 月号）に「短歌に於ける写生の説（一）」を発表し、その後 8 回に亘って写生論を展開した。[18] とくに「実相に観入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である。ここの実相は、西洋語で云へば、例えば das Reale ぐらいに取ればいい。現実の相などと砕いて云ってもいい。」という実相観入の写生論の確立をみたのである。この写生論を熱中して書き継いだのは、肺炎から恢復し、喀血から療養生活を送る、病中、病後にまとめたものである。死を予感し、死に直面した中だからこそ、実相観入が生まれたことは間違いないであろう。[19]

4．茂吉と腎臓病

茂吉は、1921（大正 10）年ヨーロッパ留学の準備のため、長崎から東京へもどった。そこで、7 月 6 日に健康診断をした結果、腎臓の異常が発見された。その時の状況を、次のように回顧している。

体格検査のをり、友人の神保孝太郎博士は私の蛋白尿を認めて注意するところがあった。「なあんだ斎藤！ Eiweiss（蛋白）が出るぢゃないか！」といった調子である。兎も角遠い旅に出るのではあり、異境に果てるやうなことがあっては悲しいとおもって、少しく煩悶もしたのであった。ある日、入沢博士の診察を受けた。先生は大体診られ、尿を検査してをられたが、「なる程、あるね」としづかに云はれた。それから血圧を検べて居られた。器械を私の腕からはづされて、一寸考へてをられる様子だったが、「まあ行って見給へ」といふ結論であった。大正九年流感後のこともあり、今回のこともあるから、兎に角私は一夏信濃富士見に転地して能ふかぎり養生して見ることにした。（「作家四十年」）[20]

そこで茂吉は、8 月 5 日から 9 月 6 日の一夏を、長野県の富士見高原に一間を借りて、養生をした。ここで、茂吉は「山水人間蟲魚」の歌をつくった。その中に次の歌がある。

ともし火のもとにさびしくわれ居りて腫（むく）みたる足のばしけるかな

みすずかる信濃国に足たゆく燈のもとにぬ糠（ぬか）を煮にけり

（『つゆじも』「山水人間蟲魚」大正十年作）

茂吉は蛋白尿が出ていることを知りながらも「腫みたる足」を脚気のせいであると考えていた。あるいは、そのように考えたかったといえよう。糠を煮て食べるような旧式な療法を試みている。そして、茂吉は8月14日に島木赤彦へ次の書簡を送った。東京にいる赤彦が、諏訪に帰郷する時に、脚気の新薬オリザニンを持参するように要請した。

三共商会の脚気の薬「オリザニン」三瓶ほど（一瓶は百グラムのものか？）御買求め下されて、御持参願上候。停車場迄頂戴にあがるから時間も一寸御しらせ願ふ。大きな薬店にはあると存候。至急御願いたし候。乱作してもいまだ十首にいたらず。脚気にて、むくみ、競ふ心すくなし。今朝、朝つゆを踏む。敬具　若シ無ケレバ君ガ出立スル迄ニ三共カラ取リ寄セテモラツテ置イテクレ玉へ。新宿通、又は麹町の薬店にありと思ふが。[21]

歌人で医者の上田三四二は「思い立ったら箭も楯もたまらぬといった心のむきがここから読み取れるが、赤彦は大正六年以来、郷里の下諏訪と東京の間を往復しながら暮していたのである。（略）が、浮腫は果して軽快したかどうか。八月二十六日にも、下諏訪にいた赤彦に、『心臓少し弱りたり、脚気のため也』と言ってやったのをみると、経過は必ずしもはかばかしくなかったようである。」[22] という。

このような健康状態でありながらも、あえて茂吉はヨーロッパへ留学した。その辺の事情は、大正10年1月20付、島木赤彦宛の書簡に記されている。

○（當分以下他言無用）小生は三月で学校をやめる。そして帰京して体を極力養生する。そして十月頃欧州に留学して少し勉強して来る。名儀は文部省の留学生といふなれど自費なり。名儀だけでもその方が便利だからである。僕はどうしても少し医学上の実のある為事をする必要がある。それには国を離れていろいろの雑務から遠離して専心にならねば駄めなり。小生は外国に行けば必ず為事が出来ると信ず。そこで兎に角行ってくる。病中いろいろ考へてこの結論に達せり。（略）

歌の方はいつでも出来るが、医学上の事は年をとるとどうしても困難になるから、今のうちにせねばならぬ。このこと大兄にようく理解して貰はねばならぬ、茂吉がアララギに冷淡になるのは全く情止みがたき為め也小生は今まで医学上の論文らしきものを拵へたるためしあらず、そのために暗々のうちに軽蔑さるこゝとなる。このこと大兄も考へて呉れることゝ思ふ小生は歌の方はずうと駄めになって大兄らより後ろになること必然なれどもそれはいたしかたなし。さう何も彼も出来るわけのものにあらざればなりたゞ茂吉は医学上の事が到々出来ずに死んだといはれるのが男として、それから専門家として残念でならぬ、一体小生はこれまで他国に出で他流に交はりしことなかりしが、長崎に来て他流の同僚に交りて、小生も左程劣りはせずといふ自信が出来、学位など持ってゐるものに較べてちっとも劣ってはゐずといふこと分り候ゆゑ、今後は少し為事をすればよろしきなり。石原君ほどの世界的の為事は到底むづかしいが、普通の人間のやる事ぐらゐは出来るつもりなり[23]

茂吉は病中、死の予感や覚悟を体験し、将来の自己を検討した。「僕はどうしても少し医学上の実のある為事」とは、もちろん精神医学上の成果ではあるが、結局は医学博士号の取得を目指すものであった。医学論文の成果がなく、「暗々のうちに軽蔑さる」という。そして「医学上の事が到々出来ずに死んだといはれるのが男として、それから専門家として残念でならぬ」とまで心情を吐露する。茂吉は、すでに『赤光』『あらたま』を上梓し、文学上の名声を得ているが、あくまでも医学に、そして学位の取得に拘泥するのである。

斎藤家に婿養子として迎えられた茂吉が、健康上の懸念などよりも、身を粉にしても学問上の成果を挙げ学位を取得するという決意が、悲痛なまでに感じられる「多言無用」という書簡である。茂吉にしてみれば、病気などしている余裕などこの時期には全くなかったのである。とはいえ、「アララギ」への未練は捨て難きものもあり、精神医学に関して他の同僚と比較しても自信があると言いつつも、不安も胸中に抱えているのであった。

また、北杜夫は「一言でいえば、歌では食べてゆけぬからである。晩年こそ全集が出たりしてかなりの高収入を得たが、この頃はそんなことは想像もできなかったことだろう。もう一つの理由は、医学界が前近代的、封建的であることである。私の時代もまさしくそうであった。その中にあって、負けず嫌いの茂吉がこのように勢いたったのは無理からぬ心情だ。軍人の世界にしてもそうである。たとえば鷗外は文学などやるからといって、留学仲間の上官、同僚中で蔑ろにされたところがずいぶんとある。しかし、鷗外のドイツ語の力は抜群であった。それゆえ、プロシャの軍略などを習うには、どうしても鷗外の語学力に頼らざるを得なかったのである。」[24] という。

茂吉にとって、鷗外の生き様を意識し、自らに重ね合わせる所もあろう。しかも、何よりも自らの生命を賭け、引き換えにしてまでも、医学博士号を取得しなければ、斎藤家に、妻てる子に対して自らのアイデンディティを確立することが困難であったからなのである。よって腎臓病ではなく、脚気を治療したかったのである。

3 年間におよぶヨーロッパでの博士論文取得という困難な研究生活は、茂吉自ら身体を顧みる余裕さえなかった。しかも、大正 14 年 1 月に茂吉が留学から帰国すると、茂吉に待っていたものは、病院再建という思いがけない重荷だった。青山脳病院は養父である斎藤紀一が経営し院長であったが、大正 12 年の関東大震災で大きな損害を受け、さらに大正 13 年 12 月には、餅つきの残り火の不始末から火事となり、300 余名の入院患者のうち、20 名が焼死するという大惨事になった。おまけに、火災保険は同年の 11 月に失効していた。その心境は、茂吉の次の歌に込められている。

うつしみの吾がなかにあるくるしみは白ひげとなりてあらはるるなり

（『ともしび』大正十四年作「焼あとに湯をあみて、爪も剪りぬ）

そして、茂吉は、病院の再開に向けて奔走し、昭和 2 年に院長に就任したのであった。翌年には、紀一は他界した。院長となって、その激務から少し余裕が出た頃に次の歌をよんだ。

茂吉われ院長となりいそしむを世のもろびとよ知りてくだされよ

（『石泉』「青山脳病院」昭和七年作）

茂吉は激務に耐え、休養の必要性を意識していたが、病気を押して働いた。漸く一段落ついて、昭和4年1月7日に、48歳の茂吉は自らの尿を検査したが、留学前から恢復していないのであった。以後連日の検尿の結果も同じで、日記には次のようにある。

一月十七日　木曜日。天気吉。寒。

1.　一人診察。試ミニ尿ヲ検査シタルニ蛋白ノ反応著シ一寸悲観セリ、（略）

一月十八日　金曜日。天気吉。

1.　検尿蛋白少シ、ソレヨリ試薬ノ沈殿ヲ解シタルニ相當ニ雲ノ状ニ濁リタリキ、（略）

一月十九日　土曜日。天気吉。

1.　検尿ヲナス。朝食かゆ、（略）

一月二十一日　月曜日。天気吉。ヤヽ暖。

1.　圓タクニ乗リテ駿河臺ニ行キ、杏雲堂ノ佐々康平君ノ診察ヲ受ク。ヤハリ Chronische Nephriitis ナリ。ソコデ養生ノ法ト薬トヲ教ハリ。[25]

1月21日には杏雲堂病院を訪ねて、友人の佐々康平に診察を乞うている。診断は予想通り慢性腎炎であった。そこで、食事療法を行うこととなったが、まさしく三日坊主で取り止めたことが日記に書かれている。

一月二十四日　木曜日、天気吉。寒気強シ。

2.　（略）ドウモ食物ガ蛋白脂肪ガ少イノデフラフラシテ困ッタ。頭痛モシタ。

3.　ソコデ鰻ヲ食シタ。（略）

4.　寒夜ニ帰リ来リ、寐タリ。ドウモ體ヲ温クシ、イクラカ旨イモノヲ食シタ方ガ工合ガヨイヤウデアル。サウデナイト心悸ガ亢ツテ工合ガワルク、夜半等ニモ心配ガ出テ困ルナリ。

一月二十五日　金曜日、天気佳。寒シ、（略）

6.　勉強セントシタルガ足ガ冷エテドウシテモイカヌノデハヤクカラ床ノ中ニモグッタ。夜半ニ目ガサメタ。ヤハリ病気ノコトガ気ニナツテ心臓ノ鼓動ガハゲシイラシイノデアツタ。

一月二十六日　土曜日、天気吉。（略）

3.　夜ニナリテ青山ニカヘリ。夜食ニうなぎヲ食ス。牛乳ニ珈琲ヲ入ル。実ハモット養生シナケレバナラヌノデアルガ、サウスルトドウモ體力ガ衰ヘテ何ニモ出来ナイカラ思切ッテカウシタ。机ノ下ニ湯婆ヲ入レテ文章ヲ少シカイタ。

一月二十七日　日曜。天気クモリ。ヤヽ暖。（略）

5.　夜食ニうなぎノ辨当ヲ食フ。ツマリ、餘リ厳格ナル食事ヲトッタモノダカラ却ッテ気力衰ヘ、動悸ガシタ。ソレヨリモ甘イ旨イモノヲ食シテ、太ク短カク生キヨウト思フ。[26]

かつて血痰の量と色を克明に記録したように、検尿検査を行ったが、恢復することなく慢性

腎炎になっていた。「ドウモ食物ガ蛋白脂肪ガ少イノデフラフラシテ困ッタ」と言い、大好物の鰻を食べ、「旨イモノヲ食シタ方ガ工合ガヨイヤウデアル」と納得させ、結論づける。さらには「太ク短カク生キヨウト思フ」とまで言い、養生することを放念した。その後は、養生について語られない。茂吉の心境は、病気を平癒する時間的な余裕もなく、養父紀一の没後に、借金を返済しつつ、病院を軌道に乗せる重責を全うしなければならなかった。

上田三四二は「大正十年、四十歳で蛋白尿を発見したとき、茂吉はおそらく慢性腎炎があった。昭和四年、四十八歳のとき受診によって確定した慢性腎炎は、その再発か、あるいはより一層の確かさをもってその悪化と想像される。そうして、腎臓病を基礎として昭和七年、五十一歳頃に高血圧症が成立し、高血圧症は、年齢と素因からくる動脈硬化症の発生を助け、次には逆にそれに助けられながら、結局典型的な高血圧・動脈硬化症の病像を完成したと見るのである。」[27] と医学的に分析する。さらに「その結果が、昭和二十二年と二十五年、六十六歳と六十九歳の茂吉を襲った脳軟化症による左半身不全麻痺であり、昭和二十六年以後、四回にわたる心臓喘息発作であった。昭和二十八年、数え年七十二歳の老人を見舞った発作は死の原因としては劇的なものだが、死は発作の一突きを待たずとも目の前に迫っていた。」[28] と続く。

茂吉は腎臓病より高血圧症、動脈硬化へと病像を完成させていった。茂吉と言えば、後生大事にしていた小水用のバケツ「極楽」[29] を思い浮かべるが、腎臓病と頻尿との関係だけではなく、神経性のものであった。幼少時の夜尿症（小便虫）に始まる頻尿は、茂吉の人間性を知るには不可欠なものである。

5. 結　　語

戦時中は郷里の山形県金瓶に疎開し、敗戦を迎えた。翌年に大石田に転居したが、そこで左肋膜炎という大患になった。その後、東京へ帰るが、脳軟化症による左半身不全麻痺となり、晩年には認知症が茂吉を襲った。茂吉の記憶力は低下し、「手帳の置場所を幾度にても」忘れるようになり、その姿を周囲にも示すようになった。

子規の晩年は、煩悶、号泣、痛哭で表現されるような壮絶な病気との闘いであった。茂吉の場合はどうであろうか。身体を蝕んだのは解剖の結果にある通り、肺における結核性病変と循環系における硬化現象であった。茂吉自らのこれらの病気の診断は、一見すると「インフルエンザをこじらせて喀血」となり、あるいは「脚気から腎臓病」になったというものであり、自らの病状を的確に診断せず、誤診とまでも言わないが、大きく甘い診断であったかのようだ。しかし、残された手帳や書簡を検証するに、結核や腎臓病に罹患したことを自覚しながらも、その病気を否定したい気持ちと、自然のなすがままに任せようという気持ちが交錯していると、見てとれる。まさに、それは「異境に果てる」ことがあっても、病気を超剋し、征圧し、自らの信念を貫徹させようとする強靭な意志と、一方では「しずかに生きよ、茂吉われよ」という病気と共に歩もうとする姿勢が窺われる。これは、人間茂吉の頑固さとユーモアという両面性

にも通底するものである。

茂吉には病気になっても、時間をかけて、ゆっくりと療養するような余裕はなかった。東京帝国大学医科大学の卒業試験前に腸チフスに感染した時のように、病気になっても、自然のままに病気を任せるしかなかった。手帳に残された連日の血痰の量と色への執着は、茂吉の粘着性もあるが、当時は不治の病気であった、結核への恐怖に対する過剰な反応のように見えるが、冷静に考えれば医者としては、当然の観察でもある。

茂吉にとって、短歌の創作活動が生命のエネルギーの源泉であり、「余業のすさび」と揶揄しながらも、病気を抱えながらも、創作活動を捨てることなど毛頭なく、時折見せる、憤怒の激烈な論争を挑むのであった。

「アララギ」の斎藤茂吉追悼号に平福一郎による「斎藤茂吉先生剖検所見概要」があるが、病と共に歩んできた、茂吉の強靱さと、慣れ親しんだ両面を垣間見ることができるのである。解剖に立ち会った一人である次男宗吉（北杜夫）は、「強制的に医学を学ばされたおかげで、私がたじろがずに遺体が切りさかれてゆくさまを見ることができたのは、やはり父に感謝せねばならぬのかも知れなかった。また父の屍の状態を一般の人よりはまともに掴むこともできた。どこもかしこも疲れきり、困憊しきった身体であった。そのことは痛々しい感じと共に、何か安堵めいた気持をも私に与えた。」[30] という。解剖によって、茂吉は身体のどの臓器も襤褸になるほど酷使し、自らの生命を燃え尽くしたことが証明されたのであった。

注

1）岡田靖雄『精神病医　斎藤茂吉の生涯』、思文閣出版、2000 年、pp.65 ～ 66
2）『斎藤茂吉全集』第 3 巻、岩波書店、1973 年、p.150
3）同巻、p.150
4）同巻、p.151
5）同巻、p.151
6）同巻、p.154
7）第 5 巻、p.33
8）第 9 巻、p.9
9）東京都健康安全センター年報 56 巻、「日本におけるスペインかぜの精密分析」2005 年、pp.369 ～ 374
10）第 33 巻、p.372
11）第 27 巻、p.57
12）同巻、pp.59 ～ 60
13）同巻、p.60
14）同巻、p.61
15）同巻、pp.62 ～ 66
16）同巻、pp.66 ～ 69
17）同巻、p.72
18）藤岡武雄『新訂版・年譜　斎藤茂吉伝』沖積舎、1987 年、p.174

19）茂吉は結核の病気観について、「結核症」で「総じて結核性の病に罹ると神経が雋鋭（しゅんえい）になって来て、健康な人の目に見えないところも見えて来る。末期になると、病に平気になり、呑気になり、将来に向っていろいろの計画などを立てるやうになるが、依然として鋭い神経を持ってゐる。それであるから、健康の人が平気でやってゐることに強い『厭味』を感じたり、細かい『あら』が見えたりする。」（大正 15 年 9 月 2 日筆）という。（第 5 巻、p,471）
20）第 10 巻、p.469
21）第 33 巻、pp.437 ～ 438
22）上田三四二『斎藤茂吉』筑摩書房、1964 年、p.45
23）第 33 巻、p.410
24）北杜夫『壮年茂吉　「つゆじも」～「ともしび」時代』、岩波現代文庫、2001 年、p.66
25）第 29 巻、pp.605 ～ 607
26）同巻、pp.610 ～ 612
27）上田三四二、前掲書、p.51
28）同上
29）山形県上山市北町弁天 1421 にある、財団法人「斎藤茂吉記念館」に展示してある。
30）北杜夫『茂吉晩年　「白き山」「つきかげ」時代』、岩波現代文庫、2001 年、p.286

参考文献

アララギ発行所（1953）『アララギ』「斎藤茂吉追悼号」
立川昭二（1989）『病いの人間史』新潮社
斎藤茂太（2000）『茂吉の体臭』岩波現代文庫